

赤ちゃんが自分で 食べていくための サポートガイド

摂食機能発達のための 口・手・こころの育て方

編著 向井美恵 千木良あき子 田村文誉

口・手の
協調体験を
大切にする



自分の手で食べることを
気をつけて見守る

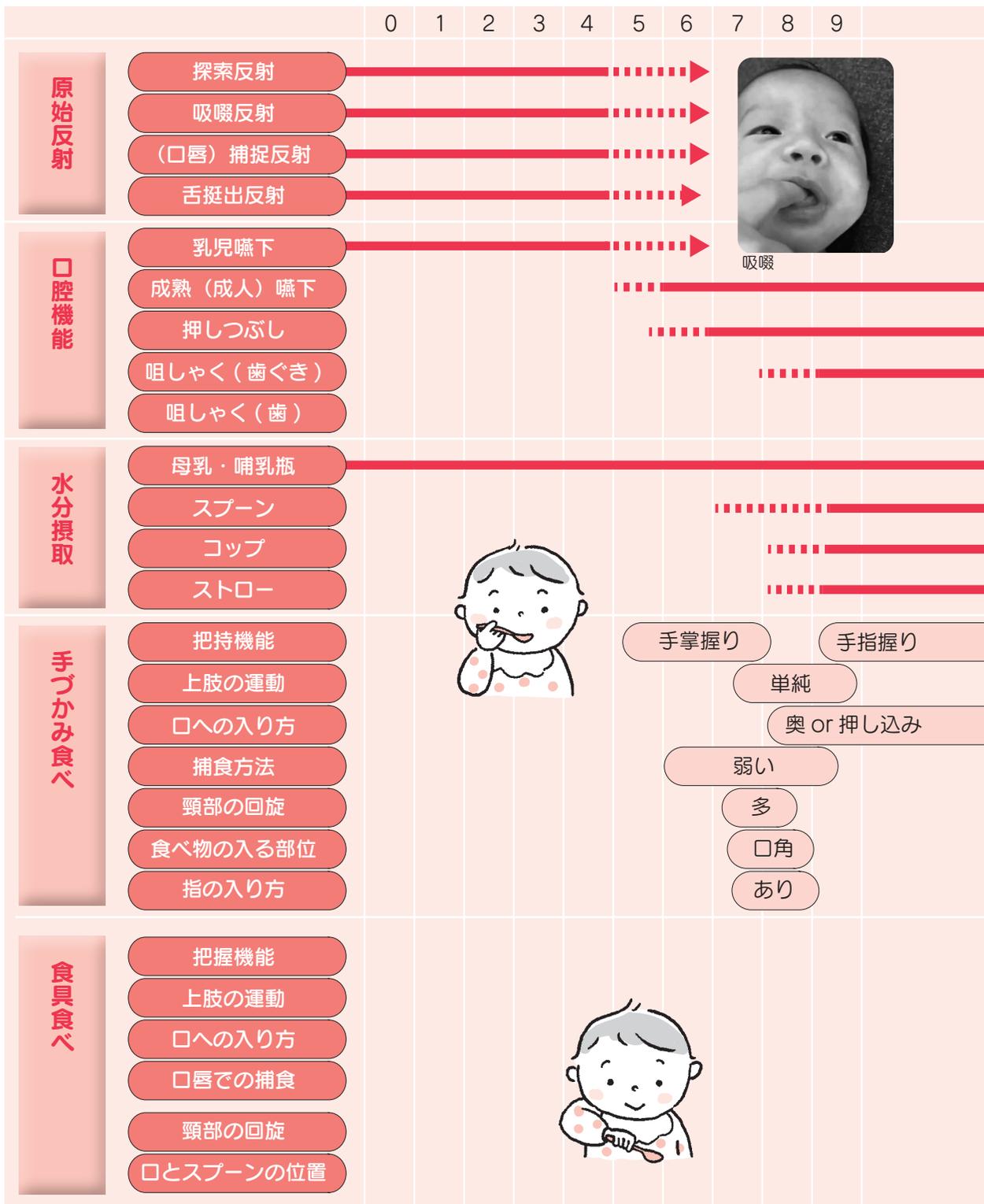


子どもの発達に
合わせる

医歯薬出版株式会社

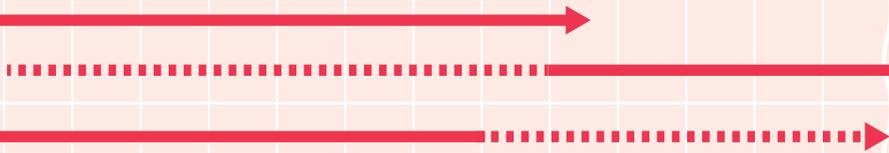
発達の流れ

(水上美樹, 西方浩一)



注) 図は平均的な発達を示しています。いずれの項目の発達についても個人差があるので、目安として利用して下さい。

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 36月



つまみ握り

協調・複合

手前

強い

少

正中

少



手づかみ



2 摂食機能獲得過程はどのように進んでいくのでしょうか？

Answer

- 摂食機能も他の機能と同様に発達の原則（p.23 参照）に従って発達します。
- 赤ちゃんの飲み方（乳児嚥下）と大人の飲み方（成人嚥下）では、口唇、顎、舌など口腔諸器官はまったく異なる動きをします。
- 口唇を使って食べ物をとり込む機能（捕食機能）は食べ物を口腔内で処理するうえでとても大切な機能であり、これにより口腔の前方部に食べ物をとり込むことが重要になります。
- それぞれの発達段階で適切な食物形態を提供しないと摂食機能の発達に問題が生じてしまいます。特に硬すぎる食べ物を与えてしまうと丸飲みが習慣化してしまうので、注意が必要です。
- 自食の際は、最初から食具を用いて行うのではなく、さまざまな遊びを通して目と手と口の協調動作を育み、手づかみ食べから徐々に食具へと移行していくことが望ましいのです。

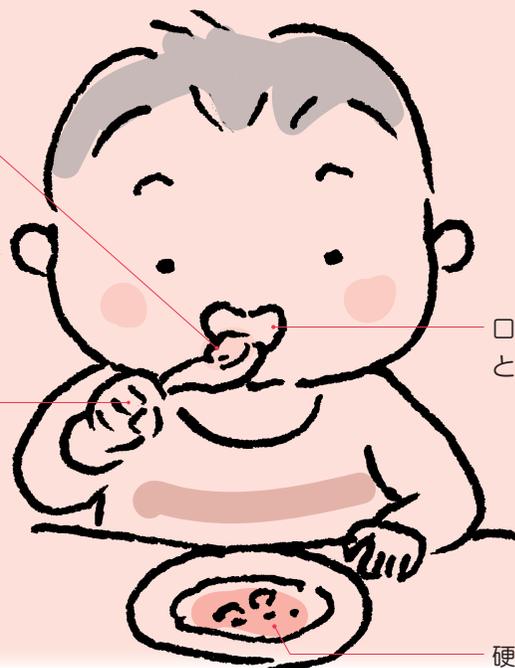


●乳児嚥下と成人嚥下の違い（尾本，2005.¹⁾を改変）

	乳児嚥下	成人嚥下
呼吸	呼気と同期するが、呼吸停止は短い	呼吸を停止して行う
口唇・顎	顎が開き，上下口唇も開いている	口唇を閉鎖して嚥下
舌尖の位置	舌尖は下顎の歯槽堤（歯ぐき）と乳首の間	舌尖は口蓋に押しつけて固定

●自食の獲得

発達状況に即した食形態を！



口の前方部に食べ物をとり込むように

- ・食具の使用は最初からではなく！
- ・手づかみ食べから徐々に食具に移行

硬すぎると丸飲みが習慣化してしまうので注意

詳しく説明します!



1 はじめに

摂食機能は生まれつきの本能で営まれるのではなく、出生後に学習し獲得されるものです。したがって、赤ちゃんが自分で食べていくことを支援するためには、摂食機能の獲得過程を知ることがとても重要です。その獲得過程を理解することによって、各段階の学習不足の未学習、誤った学習をしてしまった誤学習を防ぐことができます。

全身の発達には、順序性や予行性といった原則があります(表 3-1)。摂食機能も、例外ではなく発達の原則に沿って発達します(図 3-1)。子どもの適切な発達を促すためには、特に個人差に関して注意が必要です。ゆっくり発達している子どもに対して、月齢や年齢で比較して他の子どもができることに無理に合わせる場合は少なくありません。保護者は、同じ年齢の子ども

表 3-1 発達の原則

1. 個体と環境
2. 最適期がある
3. 一定の発現順序がある
4. 予行性がある
5. 直線的ではない
6. 個人差が大きい

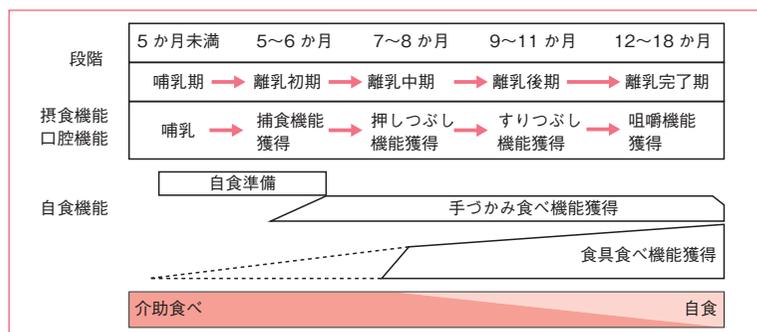


図 3-1 離乳期の摂食機能の獲得と自食機能の発達 (田角, 2014. ²⁾)

点線部は、玩具をなめる、哺乳瓶を使用するなど。